

全国鯨フォーラム2016東京

開催の記録

2016年5月31日(火)
憲政記念館講堂



全国鯨フォーラム2016東京

開催日時 2016年5月31日(火)14:00~17:00

会 場 憲政記念館講堂

開催目的

- 捕鯨に縁のある全国の自治体及び捕鯨関係者の連携を深めること
- 商業捕鯨再開に向けた国内世論を喚起すること
- 捕鯨文化、鯨食文化の継承、普及啓発を図ること
- 鯨類科学調査への理解の浸透を図ること

主催 日本捕鯨協会／捕鯨を守る全国自治体連絡協議会

共催 (一財)日本鯨類研究所／共同船舶(株)

後援 水産庁

プログラム

14:00

開会 総合司会 岩崎佑子

主催者挨拶 日本捕鯨協会会長 山村和夫 【2頁】

来賓挨拶 農林水産副大臣 伊東良孝 **【3頁】**

14:15

【第一部】基調講演 「商業捕鯨再開に向けての問題点と処方箋を考える」

IWC日本政府代表 森下丈二 【4~13頁】

15:05

質疑応答 【13~14頁】

15:15

休憩

15:25

【第二部】パネルディスカッション「捕鯨地域の伝統と文化～今後の展望」

パネリスト 釧路市長 蝦名大也【15～25頁】

石巻市長 亀山 紘

南房総市長 石井裕

太地町議会議員 三原勝利

下関市長 中尾友昭

長門市長 大西倉雄

新上五島町議会議員 坪井泰助

コーディネーター 稲垣文子

16:45

東京宣言採択 【背表紙】

16:55

閉会挨拶 捕鯨を守る全国自治体連絡協議会副会長(下関市長)

中尾友昭 【25頁】

17:00

終了／17:30～捕鯨の伝統と食文化を守る会

出席者

来賓 日本政府 農林水産副大臣 伊東良孝

国土交通大臣政務官 江島 潔

国会議員 参議院議員 林 芳正

参議院議員 鶴保庸介

自治体関係者 約70名(内、首長出席6名)

捕鯨關係者他 約170名 合計250名



【主催者挨拶】 日本捕鯨協会会長 山村和夫

日本捕鯨協会の山村でございます。ご多忙の中を「全国鯨フォーラム 2016東京」にご参加いただきまして誠に有難うございます。

我が国における捕鯨の伝統を再認識することを目的に、2002年から5年間にわたり実施されました「日本伝統捕鯨地域サミット」の精神を踏襲して、2007年から毎年各地で開催しております「全国鯨フォーラム」は、今回で10回目を迎えることになりました。

その節目の会合を東京で「捕鯨を守る全国自治体連絡協議会」と共に私もが主催をさせていただくことになりました。何卒よろしくお願い申し上げます。

本日は、北海道網走市から九州新上五島町に至るまで、捕鯨に縁が深い全国の市町村から沢山の方々にお越しいただいております。長旅でお疲れのことと存じますが、改めて「ようこそ東京へ」と歓迎の意を表させていただきます。

島国に住む私達の祖先は、数千年以上前から鯨類を食料として利用してきました。小さな魚から大きな鯨まで、あらゆる海洋生物を万遍なく利用することは、海の生態系を維持する上で誠に理に叶った行為であります。

鯨を捕る様子は、古事記や日本書紀にも登場しておりますが、室町時代に出版された「四条流包丁書」という料理の本には、鯨があれば鯉や鯛よりも先に出すのが作法であると記述されており、当時既に鯨肉は公家や武家社会の宴席に供される高級食材として周知されていたことが判ります。

江戸時代に入ると間もなく、捕鯨は全国で行われるようになり、鯨肉の生産量が増えて、広く庶民の間でも利用されるようになりました。

ここ東京では、小笠原等の離島で鯨を捕ってきた実績がある他、全国有数の鯨肉消費地としての歴史が江戸時代から続いており、それ故の食習慣やそれを反映した文化が誕生しております。

例えば、年末の12月13日、江戸の街では正月を迎える為の煤払いが一齐に行われておりましたが、その後に皆で鯨汁を食べる風習が根付きました。人口が多い江戸のことですから、その日だけで消費される鯨の量も莫大で、「江戸中で五、六匹食う13日」とか、食べた後に使用人達が故郷に帰省して行くことから「鯨汁食べてしまえば暇（いとま）乞い」といった川柳が生まれました。

さらに鯨の漢字は魚偏に大きいを意味する京、京都の京と書きますが、街並みの規模でも、あるいは鯨を食べる量においても京都に勝ると自負をしていた様子の江戸っ子は、「魚偏に江の字、鯨と書かせたい」、鯨は魚偏に京都の「京」ではなく江戸の「江」にすべきというような川柳も残されております。

その他、東京のどじょう料理店の多くは、どじょう以外に1〜2品の鯨料理をメニューに載せておりますが、これは200年前に「浅草駒形どぜう」の2代目が小さな魚だけでなく大きな魚も扱うとの洒落っ気から、どぜう鍋に加えてじら鍋を店に出したことに端を発するものですし、歌川国芳の「巨鯨の背中に乗る宮本武蔵」はじめ多くの浮世絵に、また十返舎一九等の戯作に鯨が登場しているのも江戸で培われた鯨の食習慣と無縁ではないというふうに思われます。

そして現在もまた、新しい形の鯨食文化が東京に生まれようとしております。それが今夜の「捕鯨の伝統と食文化を守る会」です。

30年前、捕鯨の継続を求める我が国は、捕鯨に反対する国や団体から様々な形で圧力を受けておりました。200海里法を盾にベーリング海での漁船操業停止等で脅す米国政府に気遣う余り、我が国政府は、鯨類捕獲調査計画を作成したものの、その実施にはなかなか踏み込めずにおりました。そうした中、反捕鯨勢力のやり方に対する疑問から、多くの国会議員や文化人が声を上げ始め、与野党5党による「捕鯨問題議員懇談会」を立ち上げたり、衆議院農水委員会で「同年漁期からの調査実施決議」を採択させる等、政府に早期の決断を迫りました。

こうした活動が実を結び、第一次鯨類捕獲調査船団は、1987年12月22日の閣議決定を得た翌日に南極海に向けて出港することが出来た訳ですが、4ヶ月後に無事役目を終えて日本に戻って来たことを祝って、先の超党派の国会議員や文化人達が各々仲間呼び掛けて、ここ憲政記念館で開催したのが「捕鯨の伝統と食文化を守る会」でした。

翌年以降は、商業捕鯨再開を期してIWCに出席する日本政府代表団を激励する壮行会などとして、この憲政記念館で毎年開催され、今回が28回目となります。

このように四半世紀以上にわたり、超党派の国会議員が同じ目的で各々の仲間呼び掛けて活動を続ける例は、それ程多いことではありません。

裏を返せば、それだけ捕鯨継続への国民の関心と期待が大きいということに他なりません。今ではIWC会議開催が近づいたことを改めて確認する行事としてすっかり定着しております。

今回の鯨フォーラムは、森下政府代表にお願いした基調講演と、各地域の鯨食文化と今までの取り組みについて総括をする為のパネルディスカッションで構成されておりますが、今夜の「捕鯨の伝統と食文化を守る会」に参加され、その様子を体験していただくことで、東京におけるこれまでの取り組みについての理解も合わせて深めていただけるものと期待しております。

以上、本日のご参加を重ねてお礼申し上げ、主催者を代表してのご挨拶といたします。ごゆっくりとお楽しみ下さい。



【来賓挨拶】 農林水産副大臣 伊東良孝

大変お忙しい中、「全国鯨フォーラム2016東京」にご出席いただき誠に有難うございます。

司会からもお話しがございました。また、山村会長からもお話がありましたように、鯨に深い関わりのある自治体をはじめ、関係者の皆様がこうして一堂に集い、再びお会いできますことに感謝を申し上げます。

私はご紹介がありましたように、農林水産省の副大臣としての立場でのご挨拶となりますが、私の地元は北海道の釧路でございます。今日は釧路市長をはじめ市議会議員の皆様もおいで頂いております。長年にわたり、戦前も戦後も捕鯨基地であり、今も9月、10月には沿岸の調査捕鯨ということで、順調に捕獲を続けております。少し残念なのは、石巻鮎川沖の沿岸小型調査捕鯨が、51頭の枠に対しまして、捕獲が20頭に届きませんでした。去年もそうでありましたけれども、資源がないわけではないのに、どうして捕れないのかなと思いつつ、もう少ししっかりした体制を作らなければいけないという思いをしているところでございます。

私自身、確か和歌山県太地町で第5回の日本伝統捕鯨地域サミットに出席させていただきました。長崎県の新上五島へも船で渡って伝統捕鯨地域サミットに参加した思い出もございます。その後、私の地元の釧路でも全国鯨フォーラムとして開催させていただきました。今日は、それぞれの地域における鯨に対する様々な取り組みを、パネルディスカッションでお聞かせいただけるということですので。

やはり鯨の味がだんだん遠くなっていく、分からなくなっていくというのは寂しいところであり、ます。捕鯨が撤収してから30年近くなるわけですが、そうなりますと「鯨を食べなくても牛肉を食べればいいんだ」という子どもたちがどんどん増えるわけであり、ます。そうならないために、鯨の美味しさや、あるいは食料資源としての鯨の有効性を子どもたちにも、一般家庭にも、教えて行く必要があるわけであり、ます。それぞれの自治体で年に数回、多いところでは毎月一回、鯨肉を料理して竜田揚げなり、カレーなり、様々な工夫をしながら鯨食の普及に努めておられるわけであり、ますけれども、私自身拙い経験で申し上げますと、年に一回9月の中旬に釧路沖で鯨が51頭揚がるものですから、産地特権で生の鯨肉を食べることができるので、それを多くの市民や、あるいは観光客の皆様に分かっていただきたいという思いがあり、市内の30店舗程の居酒屋さんや料理屋さんで、それぞれ最低でも1～2品の鯨メニューを作って一斉に鯨の売り出し週間と言いますか、全市を挙げてそのようなことを企画しております。その際、初めて鯨を食べる人、食べてみてこんなに美味しかったんだと思う人、大勢いるわけであり、ます。こうした鯨肉の普及が底辺の拡大あるいは捕鯨への理解を広めるものと、このように思っているところでございます。

今日は森下さんに基調講演を行って頂くことになっております。東京をはじめ各地域で頑張っておられる方々の情報交換の日でもございますので、どうか有意義なフォーラム、一日にして頂きたいと思っております。

また、わが国は一昨年の3月に国際司法裁判所の判決を受けて、今まで実施しておりました第二期南極海鯨類捕獲調査（JARPA II）を中止いたしました。昨年度より新たな南極海鯨類科学調査計画（NEWREP-A）を実施しているところであります。沿岸でもやっておりますし、南極海でも北西太平洋でも各地域でしっかりした調査捕鯨を実施し、科学的な根拠、あるいは分析をしっかりして発表していくことが大事だと思っております。

全国鯨フォーラムの開催にご尽力いただきました関係者に心から厚く御礼申し上げ、開会に当たりましてのご挨拶とさせていただきます。本日は誠に有難うございました。

【基調講演】

「商業捕鯨再開に向けての問題点と処方箋を考える」



IWC日本政府代表
森下丈二

国立大学法人
東京海洋大学

商業捕鯨再開に向けての問題点と処方箋を考える

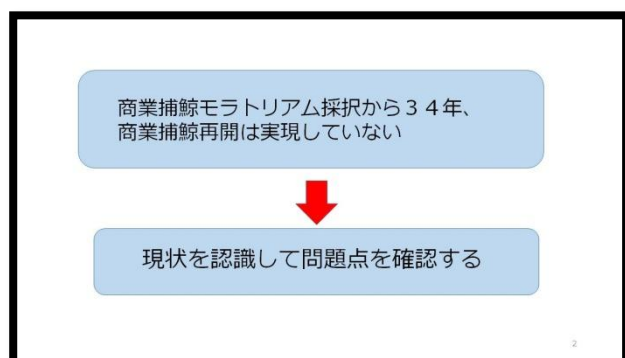
全国鯨フォーラム2016東京
2016年5月31日 於 憲政記念館

IWC日本政府代表 森 下 丈 二

今回は「全国鯨フォーラム2016東京」にお招きいただき、講演の場をいただきましたことに心から感謝致します。また、全国津々浦々からこの会のためにお越しいただいた方々にお礼を申し上げたいと思います。私の役割としては、やはり今の捕鯨問題がどのような状態にあるかということ、皆様と情報を分かち合うことだと思っています。そういう観点から今日はお話をさせていただきたいと考えております。

先ほどご紹介いただきましたが、4月1日から東京海洋大学の方に移りましたので、(スライドの)端の方に東京海洋大学のロゴを入れさせていただきました。鯨の問題につきましては、最初に関わったのが1992年になりますので、そういう意味では20年を超えて何らかのかたちで鯨の問題に関わってまいりました。非常に難しい国際的な対立、あるいは閉塞状態といえますが、感情的にもなっている鯨の問題ではあります。その中で諸先輩方が頑張られて現在の状況になっております。ただ、正直申し上げて、非常に難しい状態、それがどんどん色んな意味で更に難しくなっていると言えると思います。

2011年から13年まで約2年間、私は鯨から離れていたのですが、こういう機会を逆にいただいて、外からも鯨の問題を見て、やはりいろいろと考えるところがありました。そういうことも含めて今日お話ししたいと思いますし、様々な場面で「難しい」と言う言葉が並ぶと思います。「こうしてきたことは、こうすればよかったのではないか」、あるいは「こうすればいいんじゃないか」と自分の反省も込めて、今日はお話ししたいと考えますので、最後までお付き合いいただければと思います。



捕鯨問題の発端は、色んなところに置くことが出来ると思うんですが、いわゆる商業捕鯨モラトリウムが採択されたところから始めるのが分かりやすいかと思います。1982年です。34年経ちました。商業捕鯨はそれからずっと再開できていないわけです。それでもここまで潰れないできたと言うことは、ひとつの成果かもしれませんが、しかし再開できていないと言うことは、やはりしっかり考える必要があると思います。問題点は何なのか、それに対してどうすればいいのだろうか、と言うことを少し考えて行きたいと思ひますし、このまま現状維持の対応をして行く、今までの延長線上の対応で本当にいいのかどうか、そのことについて今回問題を提起させていただきます。

問題点 1

商業捕鯨再開には
IWCにおいて4分の3（75%）の賛成票が必要

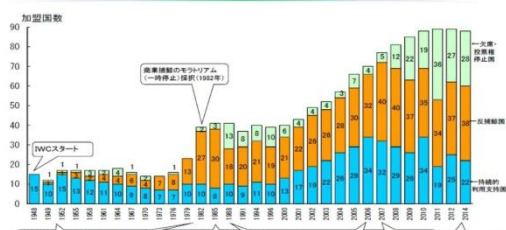
2014年IWCでの勢力分布：

持続的利用支持国	22
反捕鯨国	38
欠席国・投票権停止国	28

いくつか問題点を挙げました。商業捕鯨を国際捕鯨委員会（IWC）の場でルールに基づいて再開するためには、IWCで4分の3の得票、75%という非常に大きな得票を得なければいけません。そう言う意味では非常に難しいところがありますが、とにかくこれがルールです。そして2014年のスロベニアでのIWCの勢力分布ですが、IWC全体の88カ国の加盟国に対し、持続的利用支持国は22カ国、4分の1です。

いわゆる反捕鯨国と呼ばれる国々が38カ国ございます。2014年の場合、会議に来なかった、あるいは来ていても分担金を払っていないということで投票権がない、投票ということになれば、参加できない国々が28カ国ございました。この28カ国のうち、17～18カ国は我々の味方です。そういう意味では欠席国、投票権停止国の中で我々の味方の国が少なくとも半数以上となり、これは大きな課題の一つと言えるかと思います。

IWC加盟国の推移



このグラフのオレンジ色が反捕鯨国となります。その下のブルーが捕鯨支持国であります。2006年にピークがありました。覚えている方もいると思いますが、この時「セント kitts 宣言」ということで、持続的利用を支持する決議を採択した年です。この時は我々が34カ国ございまして、向こう側が32カ国で、初めて過半数を取ったんですね。ただ、その後を見ますと、我方はどんどん下がってしまった。他方、ここにありますように、出席できない国、あるいは投票権のない国は明らかに増える傾向があります。

特に2011年のジャージーというイギリス領の島で行われた会議では、こんなに多くの国が来れなかった。これには実は背景があります。我々の味方の国がビザを取れなかった。明確な証拠はないのですが、いじめで会議に参加できなかったという話があって、大きく落ち込みました。

これを見る限り、決して状況は楽観できない、むしろ危機感があります。我方は今22カ国です。4分の1を切ると、相手方が4分の3を取る可能性があります。そうすると法的に拘束力のあるモラトリアムのような決定を通す力が相手に出来てしまいます。そういう瀬戸際に今あるということを、よく理解していただく必要があるかと思います。

問題点 2

科学的根拠に基づく議論が成り立たない；
反捕鯨国は鯨の資源が豊富であっても捕鯨に反対

- IWCはすでに1994年に捕獲枠計算方式（RMP:改定管理方式）をコンセンサスで採択
- 科学データはそろっており、いくつかの鯨種について捕獲枠が計算可能

二つ目の問題。我々はずっと鯨類捕獲調査、調査捕鯨を実施してきていますが、科学的な根拠を積み上げ、「鯨は沢山いるんだ」、「捕れるんだ」ということであれば捕らせてもらえるんじゃないかと、勿論それが正しい道であり、希望でもあり、希望に基づいて調査を続けている訳ですが、反捕鯨国は「これは科学の問題ではない」と明確に申しております。「鯨は沢山いても捕らせないんだ」と、「それが反捕鯨の立場です」ということは、正々堂々とIWCの場で彼らは宣言するに至っております。

そういう意味で、科学的根拠に基づく議論が成り立たない、と言うのが現状です。

だからと言って、我々は科学を捨てる必要はありませんが、科学で物事がすべて解決するというのは、IWCではすでにそういう状態ではないということです。現に、IWC自身では捕獲枠を計算する方式を持っています。それに従えば枠が出るんです。日本の沿岸でも試験的にやりまして、小さな枠ですけどもミンク鯨の捕獲枠が出ます。これは科学委員会がしっかり行っているわけです。データはあるわけです。すべての鯨というわけにはいきませんが、資源の豊富なものについては捕れるところまで科学は到達しているわけですが、それでも捕鯨は再開されない。大きな問題です。

問題点3

文化論は通用しない；
反捕鯨国は捕鯨文化そのものに反対

- 国内的には、文化論は啓蒙、支持促進の観点から重要
- 対外的には、一定の効果はあるものの決定打とはならない

三番目に、文化の問題は我々にとって非常に大きなテーマです。今日のフォーラムはそのためにあるところがありますが、そういう意味で反捕鯨の立場を理解しないといけないのは、捕鯨文化そのものに反対していることです。これが日本にとって大事な文化であることを、仮に何かの形で証明できたとしても、だから許すという答えは彼らからは出てこない。いろんな話を反捕鯨国の関係者から聞きますが、例えば、捕鯨の文化というのは奴隷制度と同じだと、今時そんなことを続けているのは文化だろうが許されないと、そういう言い方をされるわけです。

勿論、国内的に文化というのは大きな問題です。我々の考え方、立場を高めて、団結を強めていくためには文化というのは大事です。また、反捕鯨国の一部の中には文化の尊重を分かっている人たちもいます。しかし、それだけではIWCで問題は解決しないというのも現実です。



ニューベットフォードという町が米国マサチューセッツ州にあります。ジョン万次郎が流れ着いて、ここで英語を学んで日本に帰ってきましたけれど、そのニューベットフォードの当時の捕鯨の姿です。ここに並んでいるのは鯨油の樽です。当時の帆船で世界中に出て行って、船の上で鯨の皮や身をぐつぐつ煮て、油だけ取ってこのように持ち帰り、このような産業を行っていたわけです。彼らからすると、このように無駄なことをやっていたことを自分たちは改心したんだと、煙草を吸うのを止めた人と一緒です。止めると他

人が煙草を吸っているのが嫌になるそうですが、これと同じようなメンタリティです。



日本の伝統捕鯨の絵図はいろいろな所にあります。我々には非常に歴史的で勇壮な日本の文化を代表する絵と見てとれますが、感情的な反捕鯨の連中からすると、何と残酷なんだと、大事な鯨を囲んで皆で虐めているではないかと思えるわけです。そのことが現実としてあると知らないといけません。

問題点4

鯨食の機会減少が国内での無関心、支持低迷につながっている

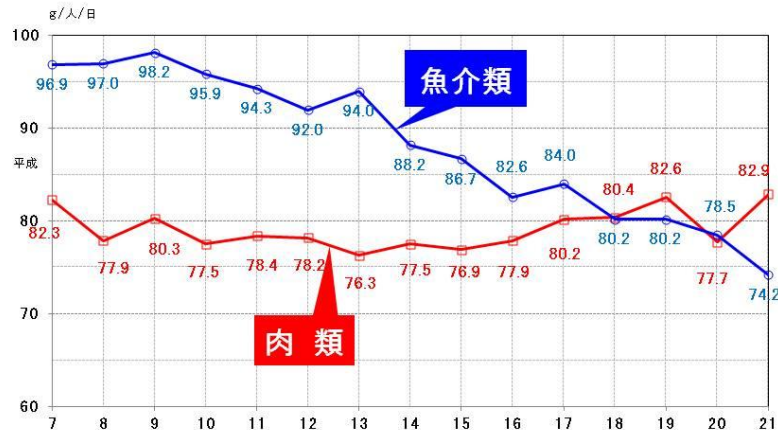
- 国民一人当たりの鯨肉供給量は年間40グラム以下
- 表面上は他に食べるものがあふれている
- 20代以下の日本人の水産物消費は米国並み

先ほど副大臣もお話しになりました。日本国内で支持を得て行くことが非常に大事なんですが、鯨食の機会がとにかく減っていると、結果的にそれが無関心につながってたり、支持が減っていることが明らかに起こっております。昨年1年間、みなと新聞に連載させていただいたんですが、一番怖いのは国内での無関心の広がりだと、最初の連載に書かせてもらいました。海外でも大変ですが、国内でも無関心の広がりには本当に怖い。

現在、鯨肉は鯨類捕獲調査の副産物、小型捕鯨業、あるいはイルカ漁で獲られているもの、多く見ても年間4千トンから5千トンになります。これが供給量です。これを日本の老若男女皆で分けると、年間一人当たり40グラムです。一年間でこれくらいです。これくらいの量が今の鯨の供給量です。ちなみに昭和37年、1962年が鯨肉の供給に関する限りはピークで、当時23万トンです。今の5千トンに対して23万トンですから、40数倍ですね。当時の日本人が食べていた動物タンパクの半分くらいは鯨でした。その頃に比べるといかに縮小したかが分かります。これも反捕鯨国の人から言われますし、現実問題としてあります、鯨を食べなくてもいいんじゃないか、他に食べ物が余っているのだから、コンビニに行けば何でもあるじゃないかと、これは大きな幻想ですよ。

ご存じのように、日本の食料自給率はたった39%しかありません。カロリーベースで39%です。輸入が止まると、ごく単純な話ですが、日本人の3分の2は食べる物がなくなります。これが日本です。しかし日々の感覚からしたら全然感じません。それから「若い人に食べてもらおう」というのは極めて正しい発想ですが、実は20代以下の方が食べる水産物の量は今やアメリカ人と同じになりました。

日本全体からいうと、減ってはいますが、まだ魚食民族です。ただそれを支えているのは、この会場を占めている私も含めて比較的高齢の方々です。鯨だけではありません。魚を食べる量が減っていき、今の20代はアメリカ人と変わりません。そういう状況の中で、いかに鯨の大事さ、大切さを訴えて行くかという大きな挑戦が我々の前にあるわけです。



10

この青い線が魚介類ですね。平成7年から21年です。こんなに減ってきて平成18年には肉と逆転しました。それだけでも鯨なり、水産物にとって危ないと良く分かります。もうひとつは平成21年ですね、魚介類が一日当たり74.2グラム、肉が82.9グラム、足すと157グラムです。平成7年には、肉が82.3グラム、魚介類96.9グラム、足すと180グラムでした。日本人はこの15年程の間に動物タンパクを食べる量が全体に減っています。

その中でも、鯨という言い方をしてもいいのか分かりませんが、こういう大きな流れがあるということもやはり認識しなければならないと思います。鯨と直接関係ないではないかと思われるかもしれませんが、鯨の問題というのはいかに食料全体の問題、一次産業の問題とつながっているかということと言い続けないと、ごく一部の人が年間40グラムしかない鯨の話をしていると言われてしまうのです。ですから敢えてこういう資料を入れさせていただきました。

世界の国の食料自給率

米国	127% (2011)	
ドイツ	92% (2011) ←	67% (1961)
フランス	129% (2011)	
イギリス	72% (2011) ←	42% (1961)
豪州	205% (2011)	
カナダ	258% (2011) ←	102% (1961)
日本	39% (2011) ←	78% (1961)

折角ですからこのデータを見て頂きましょう。これは2011年段階での国別の食料自給率です。アメリカ127%、ドイツ、イギリスでも90%、70%、フランスは穀物が沢山作られますから130%、カナダが260%、日本は先ほど申しましたように39%です。先進国は食料生産が減っているんじゃないかと思いがちなんですが、1961年、50年前の食料自給率を見ると、私もちょっとびっくりしたのですが、ドイツ67%、イギリスは42%、日本は当時80%だったんですよ。

この50年間で日本は減らしたんですよ。40%だった、日本より遥かに低かったイギリスは頑張って72%まで持って行った。イギリスは先進国です。ドイツも67%を92%まで持って行った。世の中の流れでは、先進国だけ見ても自給率をどんどん強めたんですよ。日本ではその間にどんどん食料自給が置き去りにされていった。これは、日本の食料生産について、政策として冷たいということもありますけど、日本の食料生産の基地は東京以外です。正に地域の力です。

だから日本の食料生産がないがしろに扱われるとすると、それは東京以外の地域がないがしろにされていることと同じことだと思います。

東京の食料自給率というデータがあります。1%です。東京都内では東京都民を食べさせる食料を100分の1しか作っていない。その他は全部他府県から頂いているのです。ところが全体がこんなに下がるように地方軽視です。いろいろな地方軽視、地方自治体が消滅するとか、いろいろ本が出ました。この食料の数字を見ると明らかです。鯨もこの大きな流れの中にあると思います。鯨イコール、いろいろな地域で、その中心の文化で、中心の生き方で、中心の食料生産をやってきたわけです。

このように水産、農業生産がどんどん下がっていくことを考えると、その大きな波の中で鯨ももがいている。捕鯨ももがいていることが見えないといけなし、逆に鯨を守るということは、そこへのメッセージだと少なくとも私は思っていますし、ですから鯨の問題を頑張らなければいけないと思っています。

問題点5

捕鯨に関するネガティブ・イメージが固定している

- 過去の乱獲の歴史や反捕鯨団体の宣伝により、捕鯨は悪いものであり、国際的に禁止されているというイメージが固定

とにかく捕鯨というのは日本国内にもありますが、外国ではネガティブなイメージが極めて強い。商業捕鯨モラトリアムで捕鯨というのは禁止されたんだと、実際にはそうではありません。商業捕鯨モラトリアムを導入した文言は法的にあるのですが、そこにはとりあえずデータが少ないので捕鯨を一時停止して科学的データを集めて捕獲枠を検討し直しましょうと書いてある。これは捕鯨再開手続きです。

ところがいつの間にかそれは捕鯨禁止の仕組みになりました。捕鯨をすることはいけないんだ、悪なんだ、捕鯨をやる国は遅れてる、野蛮だというような世論になってきました。これを一朝一夕に変えることは現実問題として非常に難しい。またある国の話になりますが、うちの国で鯨を殺すと言う話は、人間の赤ん坊を殺すのと同じくらいの感情を引き起こす話だといっていました。それをそんな馬鹿なと否定するのは簡単ですが、感情というのは理屈とは関係なしに動きます。そういう国を相手に我々はやりあわなければいけないということです。



(Ameblo.jp)

そういう思い込みに基づいて、反捕鯨のデモが世界中で起こるわけです。あるいはシーシェパードというような狂信的な団体が生まれる背景にはそれがあります。反対している人たちからすると、自分たちが日本を攻めているとか、加害者という意識は全然ないです。我々捕鯨の問題では外から責められている、日本の文化に対する攻撃だ、あるいは外国の人たちは肉を食っているのにこういうことを言うのは何事かと。日本人にとって被害者意識は相当強いですが、相手にとって加害者意識はありません。むしろこの人たちは日本が

加害者だと思っています。日本が環境にとって非常に大事な鯨を殺している悪者、加害者だという意識です。従って彼らは自分たちが正義の為にやっている、宗教論と鯨がつながるとよくいわれますけれども、正に宣教師の頭です。自分たちの正義を、日本が受け入れるということは世の中の為になるのだ、というのが反捕鯨論の根本にあります。

捕鯨問題の本質は、鯨と捕鯨に関して相容れない考え方があるという事実

鯨を持続可能な利用ができる資源と見るか、
いかなる条件下でも捕獲すべきではない環境
保護のシンボルとしてみるか



問題の本質について、正面から議論すべきではないか

捕鯨問題の本質というのは、鯨や捕鯨についての考え方の大きな違い。それは説得してもなかなか動かない大きな違いがあります。我々は他の生物資源と同様、漁業資源と同様に持続的利用が出来る資源と見ますが、反捕鯨国では、それは沢山いようがどんな条件下でも捕獲すべきではない、環境保護運動のシンボルというふうに見ます。全くかみ合いません。かみ合うようにできるという交渉がありうるかというと、ないと思います。

IWCでは問題の所在（相容れない立場）と解決策に関する議論（「IWCの将来」プロジェクトなど）との間に、ミスマッチが存在する



成り立たない「和平」交渉

ミス

IWCの議論では、例えば、日本の沿岸捕鯨に捕獲枠を下さい、科学的データはこうなっていますが、これは本質論ではないんですね。ある意味、国際捕鯨委員会で捕鯨を認める国とそうじゃない国が併存しているということが本当の問題です。それで国際委員会というかたちになっているわけですが、果たしてそれで大丈夫なのか。あるいはそれがどういう意味なのか。それを考える時期にもう来ているのだと思います。

そういう意味ではIWCで今まで和平交渉と言いますか、妥協を求めるための試みが行われてきました。「IWCの将来」というプロジェクトが一番最近までありまして、例えば日本に一部捕鯨を認める代わりに、大西洋の南側については鯨を捕ってはいけないサンクチュアリーを導入しよう、交渉としてはありえますね。ギブ・アンド・テイクの最終的なかたちを作ろうという努力を行いました。過去にも3回、4回とやっています。ところが、本当の本質は鯨の見方が全然違うんですね。反捕鯨国からすると妥協案という真中はないんです。1頭でも鯨を捕るとすると全く相入れませんから、ここには明らかに解決策としていろいろパッケージを考えるということと、問題の本質の間にミスマッチがあります。

いつまでたっても合意が出来ない、妥協が出来ない、あるいは前進しないというのは、そもそも本当の問題でないことを議論しているからです。

従ってIWCでは今の状況にある限り交渉は成り立たないんだと。ですから妥協、あるいは理解を求めて粘り強く話をすることには限界があるのではないのでしょうか。



これも副大臣の発言、あるいは山村会長の話にありましたように、国際捕鯨委員会での動きだけではなくて、国際司法裁判所（ICJ）で2014年に「日本の南極海の調査は違法だから止めろ」と言う判決が出ました。その直後の日本語版「ニューズウィーク」の表紙です。問題を非常によく表していると思います。

「捕鯨に未来はあるのか」、日本の議論は国際司法裁判所でああいうかたちになったわけですから劣勢だと、我々も良く考えないといけないと、正面から見つめるべき問題提起をこの表紙はしているんだと思います。今まで通りの延長戦でやっているとどんどんジリ貧になります。それを感じていらっしゃる方も多いと思います。

我々は前進していると考えている方がいたら、そこには誤解があると思います。国内においても、国外においても、これは後でまた議論していただいてもいいと思います。

一步も譲らないで頑張れという交渉も勿論出来ます。ある意味私もその方が楽です。何も考えないでみんな反対すればいいのですから。ただそうやっているうちに、ハッと振り向いたら後ろに捕鯨はなかった、ハッと振り向いたら日本の地域の伝統が消えてた、ということが起こりうる怖さというのは非常に感じます。それが起こらないためにはどうするか。

はたして処方箋はあるのか？

これに尽きると思いますけれども。

IWCでの支持拡大

- 目標は4分の3確保か、4分の1の死守か
- 持続的利用支持国の団結の維持と強化
- 反捕鯨国への働きかけ、取り崩し
- 捕鯨を他の国際関係から孤立させない

勿論 IWC で支持を拡大する努力をすることは続けて行かなければいけません。4 分の 3、非常に遠いゴールだと言うことは先ほど見ていただいたとおりです。ただ、4 分の 3 をゴールにするのか、あるいは 4 分の 1 を守るのか、こういうことも少し考えないといけない。ただ、4 分の 1 を守るとゴールを低くした段階で、たぶん交渉としては良くないんだと思います。私の頭の中では、実はどちらでもないと思っています。そもそも、この国際機関では 4 分の 3 を取るか、4 分の 1 を取るかという問題設定が間違っているのだと思います。

先ほど言いましたように、とにかく考え方が全く違っている人達がいるわけです。その決着を票で納めるといのはやり方が間違っています。

いつも全く変な例を挙げて申し訳ないんですが、全く考え方が違う夫婦の間で、もう一緒に居れない状況になった時に多数決など取りません。あるいは理屈で何かやっても無理です。それはお互いに完全に無視するという、平和共存を取るか、あっさり分かれるかです。IWC もそういう状態にあるのではないのでしょうか。あっさり分かれると言うのは脱退ですね。これは後で話しましょう。

我々を支持してくれる持続的利用支持国、ここは本当に大事にしないといけないと思います。我々以上にいろいろな圧力をいろんな国から受けながら支持してくれています。もし仮に何か違うアプローチを取るとしたら、彼らと心中するつもりでやらないといけない。

それから今一生懸命自分の味方を増やす努力、味方を維持する努力をしていただいています、相手を取り崩す努力、反捕鯨国を減らす努力もしなければいけません。

正直な話、日本は相手を脅す交渉が極めて下手です。「こんなことをやっている日本は怒るよ」という意思を示したことがほとんどありません。ある意味では反捕鯨国、特に小さい反捕鯨国ですね、付き合いで出てきている反捕鯨国は、日本が怒らなかつたら安心して反捕鯨国の立場を取るわけです。相手がアメリカだとか大きな国であれば日本が怒ろうがそこはがっぷり四つに組むことがあるかと思っています。日本とはほとんど外交関係のない国があります。今回会議のあるスロベニアもそうです。それでも EU との付き合いで反捕鯨という立場をとります。日本が捕鯨の問題は二国間に悪影響を与えないようにしようねと言った途端に、「うち怒らないから、おたくが反捕鯨の立場をとってもいいよ」と言っているのと同じです。それでは絶対に向こうは立場を変えません。喜んで反捕鯨を続けます。そういう交渉でいいのだろうか。

これが人と人との交渉、国と国との交渉もそうですが、押したり引いたりして初めて交渉です。それが鯨では成り立っていないんだと私は思います。これと似た話ですが、捕鯨問題は他とは関係ないからねと、日本政府は良くいいます。例えば TPP とは関係ないから、いくらオーストラリアと仲が良いとはいっても「それは捕鯨には影響しませんよね」と確認しちゃう。オーストラリアの世論とは、例えば捕鯨の問題についてオーストラリアは日本の TPP への参加を拒否すべきだという議論を、あるいはこないだ潜水艦を売り損ねましたよね、売り損ねる前から日本が潜水艦を売りたいのなら捕鯨を止めさせると言う世論が出てくるのです。オーストラリア政府がそれを正面切って外交の場で言うかどうかは別として、我々の耳には聞こえてくるのです。反捕鯨の国に日本国内からそういう声は聞こえているのでしょうか。たぶん聞こえてないと思います。

鯨類科学調査

- 調査の実施は商業捕鯨再開にいたるための条件整備、調査継続は目的ではない
- あくまで科学的必要性に基づく計画と実施

調査の継続は目的ではありません。調査をすることでデータを積み上げて商業捕鯨を再開することが目的です。ただ、どこかの段階で、潜在的なのかもしれませんが、いかに調査を続けるか頑張っているところが、我々にあるような気もします。それは私の反省も含めてです。しかし、そうなってしまうと調査と商業捕鯨の境みたいなものがだんだん曖昧になってしまい、もしかすると I C J で負けた要因かもしれません。

調査はあくまで調査として科学者がどこへ行っても胸を張って主張し、データを集め成果を発表できる調査でなければなりません。これは非常に難しい。特にデータを集めて行けば行くほど、科学的なレベルが上がります。我々既に30年を超える調査をやっております。先ほども言いましたように、鯨は利用できるんだというデータを積み上げているのです。勿論それを簡単に認めない国もありますけど、科学的には非常に大きな仕事になります。お金と科学者が無限にあれば出来ないことはないのですが、当然そこには物理的な限界もあります。

IWC脱退による商業捕鯨再開

- IWCを脱退しても自由に捕鯨ができるわけではない
- 南極海については南極条約等の規定により捕鯨不可
- IWCに代わる新たな国際機関の設立が必要
- 公海、200カイリ水域、領海

今まで私が言ったことはご存知の方がたくさんいるので、だから前から対応すべきだと言う話が出てきます。どっちがいいのかということがありますが、ただ検討は真剣にやるべきです。検討の中で安易に思っただけいけないのは、IWCを辞めさえすればいつでも捕鯨は出来るだろう、なんで日本政府はやらないんだという単純な考えがあればそれは間違いです。今我々は国際捕鯨取締条約で守られているのです。

そこから抜けると、例えば南極条約であるとか、国連海洋法条約という他の法律に縛られてほぼ自動的に南極海では捕鯨が出来なくなります。あるいはやることは完全に違法になります。日本が違法でもやるんだという腹固めでもしなければ脱退しても捕鯨は出来ないのです。そういう腹固めをするということもあるかもしれません。

抜けてちゃんと捕鯨が出来るようにするにはIWCに代わる国際機関が必要です。実はこれまでもトライしました。2回ほどトライして2回とも失敗しています。決して簡単な問題ではありません。

200海里の中まで国際法の支配をうけてもですね、国連海洋条約上確かにそう読めるのですが、はたしてその枠組みの中だけでやっていて埒が開くのかどうか。あるいは法を無視してしまうと勿論良くないですけど、先住民の人たちと付き合う機会があるのですが、彼らも自分たちの海域で鯨を獲っています。アラスカであったり、ロシアの極東であったり、彼らが言うのは、自分たちが何百年も何千年も続けてきた捕鯨を許してもらうために、わざわざスロベニアなり、アメリカまで来て我々の捕鯨を許して下さいと頼まなければいけない、なんでこんな風になっているのだと、国際法なんか後から来たんだらうと、彼らに言わせるとですね。これは心情です。特に沿岸では我々も全く同じ心情です。それに我々は面と向かった検討をしてきたんだらうかという私の心の中の声もあります。リスクもありますし、無謀なことを言っていると言われるかもしれませんが、現状維持がもし駄目だとしたら、今の枠からはみ出た考え方をしない限り、IWCでの前進はあり得ないという気がします。

今までの延長線での対応では限界が見える

- 強まる反捕鯨勢力からの攻勢
- 国内での捕鯨問題への関心低下の懸念
- IWCでの4分の3の得票確保は極めて困難
- 科学、文化論、法律論が通じない

ここに書いてあるとおりです。おさらいです。反捕鯨勢力、特にシーシェパードには苦しめられましたよね。国内の関心の低下。4分の3の話。この中で一步も譲らないで現状維持するためにはですね、もしそれが方針だとすれば、新しいことをやらずに非常な体力が要ります。こういう会合をしばしばやる。国際圧力の中で調査を出して行く。お金も人も労力もいるわけですが、その体力を支えるのは、例えば国内の支持。それがやはり危機に瀕している。I C J の判決があったことを受けて、政府も非常に慎重になっています。

これは避けがたい事実です。ただ慎重になって小さく固まってしまうともっと押し込まれるのが国際的な交渉の常です。どうすればいいか。

- 捕鯨は環境問題ではない
- 本当の交渉を行うには「攻め」も必要
- 他方、交渉であれば100%の勝利もない
- 目標と目標達成に至る道筋についての理解の共有
- 日本全体にとって捕鯨の再開が必要であることを説明しきれていない

いくつか思いつきを紹介します。「環境問題ではない」。びっくりされる方もいるかもしれませんが、よく「環境団体に責められる」、「環境団体と漁業」という問題の設定の仕方、我々も言いますよね、「環境団体は捕鯨に反対している」とか。だから環境問題だと言う風に我々も思っているかもしれないですが、環境問題ではありません。環境問題というのは、例えば生物資源を枯渇に追いやる、海洋の環境を汚染する、生物多様性を脅かす、そういうのが環境の破壊です。

鯨を持続的に利用していくというのは環境の破壊ではないですから、それを自分で環境問題と言ってもダメなんです。それは自分で勝手に「環境問題対鯨」、「環境問題対漁業」、「環境団体に責められてクロマグロが危ない」という言い方しますが、大間違いです。自分でそうやってしまえば、我々は環境を破壊する悪者だと言っていることになります。そこから変えましょう。私が言う鯨の問題も必ず反捕鯨団体と言います。あるいは持続的利用不支持国と言います。環境団体とは絶対言いません。それは自分の信念であるし、間違っていることです。

変な例ですけど、自分も含めて政府の役人がそうですが、こういう疑問が出てきたらこう答えるという頭があるんですね、例えばICJに負けてこれが条件だと言われたからこう答えましょうと。それをずっとやり続けて日本は一生懸命答えて、今の捕鯨があったり、今の漁業があります。何を言っているかという、この疑問質問自体がおかしいのではなかという考え方をしていけないと、状況が変わってこないと思うんです。目の前に置かれたテストの問題用紙を見て、答えて行くのが捕鯨政策ではない。この問題用紙でいいのか、ここに載っている問題は正しいのか、こんな試験を受けるのが大事なのか、そこから考え直して行かないと相手の土俵で相撲を取っているだけです。これはジリ貧になって当たり前です。ここを変えて行きましょう。先ほども言いましたが、理解を求める、あるいは日本が宿題をこなして行くだけでは絶対に前進しません。相手を攻めないといけません。それが交渉です。ただ交渉というのは自分が100%勝つこともありませんし、100%失ってもいけない。ギブ・アンド・テイクですよ。だから本当に交渉をやるつもりであれば、何かを譲って何かを獲るという明確な意思決定、あるいは問題意識がなければ交渉出来ません。

日本政府代表という重たい肩書を頂いていますが、私の考えだけでこれを出してこれを取ろうとひとりで決めることはできません。いろんな人達がちゃんと考えて、関係者あるいは日本全体が目標の達成（商業捕鯨の再開）に至る道筋を理解して、ここまでは諦めようと言ったら語弊がありますが、交渉の中でここを狙おうというような理解がなければやはり難しいと思うんですね。

それから日本での無関心がとにかく怖い。ところが日本全体にとって捕鯨再開がいかに大事であるかということをおはなかなか説明しきれていないと思います。先ほど言いましたがひとり40グラム。それから水産物の消費、20代の人アメリカ人と同じになってしまった。見掛け上、コンビニには食べ物が増えているときに、食料安全保障の為に捕鯨を再開するとされてピンとくる人はなかなかいない。どう言えいいか。何を訴えるのか。勿論、捕鯨文化を守るといのは大きなメッセージですから、それもありますけれど、日本全体にとって再開しないといけない理由をきっちりと説明しきれているかどうか。

このキーのひとつは地方自治体の力だと思います。東京とか中央政府に頼っているだけではダメなんだろうと。食料政策なり、地方創生、これは一次産業と繋がっています。東京のまねをして大きくなろうとそう簡単には行かないはずなんです。そういう時に、捕鯨ほどいい、鯨ほどいいネタはないんですよ。今まで、ここまで頑張ってきたのは正に全国自治体連絡協議会の皆様の力があります。これからはもっと大事になると思います。山村会長の話にもありましたが、難しい局面になると政府の決断はたいへん難しくなります。その分遅くなったり、慎重になったりします。これは避けられない。政府があまりに行け行けドンドンで好きなことをやっていけば国としては危ない。その時に自治体の声がいかにしっかりしているか、良く考えているか、それも大きな力だと思います。私は標準語でしゃべっているのになかなか見えない所がありますが、両親は小豆島出身です。香川県です。大学ではずっと大阪にいました。東京に来た時に「地方の人だ」と言われてびっくりしました。そういうメンタリティなのかと改めて思ってしまった。日本というのは明確に中央とか地方という感じだとか、敢えて申し上げれば、財政上しょうがないところがありますが、地方はどうしても中央なり日本政府に頼らなければならないことが一杯あります。そういう構造の中で物事が動いているのでこうなっているのかもしれませんが、その結果があのような食料自給率ということですよ。それも鯨の問題の一側面ではないかと思います。

例えば外国の国、アメリカに私は合計5年住んでいましたが、アメリカの地方は日本の地方と全然感じが違います。

例えば連邦政府にいろいろなことを頼って何かしてもらおうという頭は全然ない。あるいは自分たちは田舎だから都会に対してどうのと、都会のまねをして地方を興そうという、そういうメンタリティはびっくりするほどありません。それは良い意味で地方が自立しているのです。地方が中央以外にも自分たちが持っている資源、人、状況というものをちゃんと使って生き延びているので、外で何が起ころうとあまり気にしていない。アメリカには全国紙と呼ばれる新聞がありません。地元の新聞の第一面は地元の記事です。そうやって住んで、そうやって栄えるんです。

「捕鯨の灯を守る」から 「商業捕鯨の再開を勝ち取る」へ

今日言いたかったのはこれに尽きます。捕鯨の灯を守るというのは大事ですけれども、捕鯨の灯を守るといふのを目標にしているとどうしても受け身になります。商業捕鯨の再開を勝ち取るために何をするのかという問題の設定を、我々自身がちゃんとする時期だと思います。考え方を变えることによっておそらく取れる措置も、やることも、方向性も、何か新しい風が吹きます。いろいろと勝手なことを申し上げましたが、何かがきっかけになって、こういうカタチに動いていけば今日講演させていただいた価値があると思います。

いろいろ批判などもしましたが、正しいことをちゃんと見るということが鉄則でございます。ご静聴有難うございました。

【質疑応答】

【質問】説明の中で触れられませんでした。ようするに鯨だけがなぜ特別なのか、鯨だけを捕ったらなぜ悪いのか。もうひとつは、鯨が年間で海洋生物、我々が食べる魚、そういったものをたくさん食べるわけですね。一頭だけでもそれだけの魚を獲る。それが我々の食料資源を奪っていると思う。その2点について教えて頂きたい。

【回答】世界的には鯨だけじゃないです、いわゆる環境問題の世界的な議論の中では、カリスマティック・アニマルという言葉があります。結局、カリスマ性のあるような動物というのは、資源の状態に関わらず、保護すべきだという考え方が世界中で広がっています。鯨がその内のひとつです。これがアフリカゾウであったり、トラであったり、我々の漁業関係ではサメがこれに当たります。例えばアフリカゾウの問題を追っている方はそんなにいないと思いますが、我々素人ですから、アフリカゾウも絶滅に瀕しているのだろーと思えますよね。これも大きな思い込みです。鯨と同じです。我々がアフリカゾウの問題の外に立った時、鯨の問題で反捕鯨の人達が思っているのと同じ誤解をしまっている。非常に減ってしまっている場所があるんです。密猟も残っています。ところがアフリカゾウの保護が大成功している国々があり、そこでは村にアフリカゾウが踏みこんできて民家を潰したり、畑を荒らしたり、そういうところがあるんですが、間引くという話をした瞬間に絶対に触るなとなる。アフリカの人達の生活よりはゾウの方が大事です。トラがいろんなところに出てきて人間を食べたりしますけれど、トラを殺すよりはなるべく人間がトラの生活を脅かさないようにという立場をとっています。動物園で見る動物はたくさんいますよね、トラとか、ゾウとか。こういうのがカリスマ動物と呼ばれています。鯨の絵はそこら中に載っていますよね。ゾウもそうです。トラもそうです。そうなってしまったら最後、触ってはいけないカリスマ動物として扱われるという流れが世界にはあります。

だからこそ捕鯨の問題で我々に味方してくれる国々は、例えばアフリカだとか、その共通性をすぐに見抜いているんです。それから捕食の問題ですね、鯨がたくさん食べるから飢餓になっていく。おそらく世界の何カ所にはそういうスポットがあります、日本の周りも含めて。それは反捕鯨国にしても認めている。認めているんですが、彼らの場合、それなら漁業を縮小しようという答えが出てきます。実際にアラスカ湾ではトドとスケトウダラと漁業の競合がありました。トドはスケトウダラを食べる。日本もかつてアメリカの200海里でスケトウダラを130万トンぐらい獲ってました。今はアメリカの漁業者が獲っています。アメリカの漁業者は獲り過ぎて競合するということで、トドのために相当の海域で漁業が禁止になりました。ちなみにスケトウダラ資源は極めて健全です。枯渇なんかしてません。それでも獲り合いになっているとトドのために漁業を止めさせるというのがアメリカの基準です。アメリカが唯一の例外ではありません。別の星の話のように聞こえるかもしれませんが。そういう大きな絵の中で戦っているのが鯨の問題です。マグロであったり、サメの混獲で責められたり、海鳥の混獲で責められたり、というのは根はぜんぶ同じ所です。それをちゃんと伝えられるかどうかというのは、もしかすると捕鯨に対する無関心を日本国内で解いていくためのキーかもしれない。これも非常に難しい問題ではありますけれど、それを理解していないと、やはりなんで捕鯨問題がこじれるのかを理解するのは難しいと思います。

【質問】鯨食人口というのはどんどん減っているのだと思います。「クジラ食文化を守る会」というのがありますが、「クジラ食文化を広げる会」というふうに変えなければいけない。鯨食人口が高齢化している中で、子どもたちが無関心。これを昔みたいに学校給食など考えながら、議論もあろうが、採算が取れないならね、助成基金を活用して鯨食を増やしていく。今後の課題として助成金問題も含めてやっていかなければならないと思います。

【回答】おっしゃる通りで何の異論もありません。ひとつだけ加えて言えば、鯨の供給量から考えて、むしろ鯨は東京で食べられないようにした方がいいんじゃないかと思います。裏を返せば、東京以外の今日、正にお集まりの首長様の地元ではしっかり鯨のいろんな料理が食べられる。でも東京では食べられないんだと。その方が私はいろいろな意味で面白いんじゃないかと思っています。鯨を食べたい人は足を運ぶわけです。地方の名産になるわけです。供給量の少ないところ、あるいはたった食料自給率1%の東京都民に広く食べさせることにする同じ努力をいくつかの自治体でした方がインパクトも効果も遥かに大きいと思うんですがいかがでしょうか。



【パネルディスカッション】 「捕鯨地域の伝統と文化～今後の展望」

パネリスト 釧路市長 蝦名大也
石巻市長 亀山 紘
南房総市長 石井 裕
太地町議会議員 三原勝利
長門市市長 大西倉雄
下関市長 中尾友昭
新上五島町議会議員 坪井泰助
コーディネーター 稲垣文子



コーディネーターを務めます稲垣です。今日のディスカッションを進めて行くに当たり、私も勉強してまいりましたが、日本には捕鯨と関わりのある土地がこんなにたくさんあるんだと、それから今でもその土地の皆様によって捕鯨文化が守られているんだということを改めて知ったところでございます。

特になるほどと感じましたのが、学校給食で鯨料理を出されている数について、全国でおよそ延べ6000校で鯨メニューが出されているんですね。

6000と聞きますと、けっこうあるじゃないかと思われるかもしれませんが、これを割合で考えてみますと、全国で今小中学校合わせて33000校なんですね。この6000という数字、実は今の日本が置かれている状況を端的に示す数字じゃないかと思いました。

それでは早速進めてまいります。まずはパネラーの皆様にご自己紹介していただきたいと思います。合わせまして、それぞれの地元が捕鯨とどのように関わっているのか、あるいは捕鯨文化を伝承していくためどんな取り組みを具体的にされているのか、そんなところをご紹介いただければと思います。

まずはミンク鯨の沿岸域調査を行っている北海道釧路市の蝦名市長からお願いしたいと思います。釧路市では市内の小中学校の給食に鯨メニューが出されている等、様々な取り組みを通して鯨の町づくりを進めていると伺いました。そのところをお話いただけますでしょうか。



北海道釧路市長の蝦名でございます。先ほど釧路は寒いというお話がでしたが、10度ということであります。この言葉を「涼しい」という言い方に変えますと、釧路は今「涼しい釧路で避暑生活」ということで夏の長期滞在に取り組んでいます。5年程前に日経トレンディに「涼しい町の一番」ということで釧路が紹介され、猛暑の東京、関西方面からどうぞということで、宅建協会やホテルと連携を取りながら、北海道で長期滞在の取り組みを行い、5年連続ナンバーワンの実績を誇っているところでございます。

夏の最高気温の平均が22度ぐらいでありますから、極めて快適なところでございますし、皆さんにも来ていただければと思います。合わせて花粉症でお悩みの方、北海道はスギ花粉がないんですね。シラカバの花粉はあるんですが、しかし釧路には全く花粉がないことがデータ的に出ておりまして、花粉のない快適空間ということでも売っていますので来ていただければ有り難いなと思うところでございます。

皆様がお持ちになっている資料の中にわが町の歴史的な部分は書かれております。昭和30年代に全国1位の鯨の捕獲があって、そのような歴史があったところが、先ほど来のお話のように、モラトリウムが発効以来水揚げが少なくなってきたということがございます。そういった中でミンク鯨の調査捕鯨がスタートしています。平成12年、13年に予備調査が行われて14年より実施。平成15年に1回休んで、平成16年から今日まで続けているところでございます。

その中で平成17年から釧路市内にくじら協議会という行政と水産団体のトップの方に入っていた協議会を作り、その中で鯨食文化といったものをしっかり町の中で進めて行こうと、こうした取り組みが行われているところでございます。実はこのスタートを切ったのが、先ほどご挨拶いただきました伊東良孝農林水産副大臣がちょうど私の前の市長時代にこれを執り行いまして、それが平成17年になります。私が市長に就任したのは平成20年11月でございますが、その中で現伊東副大臣から引継事項というのがございまして、その中で言われたのが1点だけだったと思います。「鯨食文化を釧路で進めてくれ、絶対これだけは頼む」と言うお話を頂いて、進めております。伊東副大臣が市長時代の4年間、それから8年間これをずっと続けているところでございます。やる以上はしっかり充実させていこうと、先ほど副大臣からもお話がありましたが、スタンプラリーをやりながら飲食店の方々に調査捕鯨の配分肉をこの機会に使って、スタートが10店舗ぐらいの中で、それぞれのお店がどのような鯨料理を出すかというのですが、今それが増えてきて30店舗とこのように拡大してきているところでございます。しっかりと鯨による町づくり、鯨食文化を地方の中からしっかり進めて行こうと、こんな取り組みを頑張っているところでございます。

そして先ほどお話がありました、学校給食も年2回になるわけですが、市内の小学校、中学校全部に出しているわけでありまして、1回だいたい13000食、これを年2回行っているところでございます。これは正に町を挙げながら多くの方々の協力を頂きながら進めているところでありますが、これもやはり2割に満たない学校給食で使っているところを、どうやって増やしていくかということが重要になってくると思っております。先ほどの森下先生の地方で食べるというお話、私も9月から10月に鯨の赤肉を刺身で出したりすることを進めているところでございます。しかしやはり拡大していくことも重要だと思っております、そのためにはひとつひとつの事業を行っていくのが、ある意味自治体の税金といいますか、地域のお金で成り立っているということでありまして、ここをどうやってこれから進めて行くのが重要になってくると思っております。

北海道は日本の面積の5分の1でございまして、自治体の数では179ございます。生活圏が6つに分かれているのですが、私の生活圏では釧路市を中心として全部で13の自治体があるんです。では13の自治体の中に釧路市と連携をしながら鯨を食べることを進めて行こうかなれば、なかなか他の所が進めて行くのが難しい。それぞれの自治体のお金を使いながらやっていかなくてはいけないということになるのですね。鯨肉の方は供給はしていただけるのですが、加工するとか、そういったかたちの中で学校給食を作っていく、私たちの中では学校給食課ですけれども、コストをかけながら進めて行くとなると、それも他の自治体と一緒にやっていきましようかなとなると、なかなか厳しい状況で進んでいかない。一般的に食べられている食べ物であれば何でもいいんですけど、そういった物と同じように鯨肉を使って行って、そしてその中で鯨の伝統文化というものを守っていけるというかたちになれば、拡大が出来るのですけれど、私の自治体では覚悟をしながら進めて行くところでありますが、それをさらに拡大していくためには様々な手段、手立てというものが要になってくると思っております。

今回のタイトルの中でも伝統とか文化という言葉が出ていますがございまして、伝統というものにはたまたま偶然に残ったものはないと言われております。常にその時代に意識した、残さなければいけないという意識があって初めて続いてきて伝統になるということでございますので、如何にこの鯨食文化といいますか、鯨肉を食べるという伝統という以上は、意思を持って進めていくのか、それは地方がやるのか、どこがやるのかということも出てきますけれど、ここがやはり重要なポイントになってくると、このように考えております。私もはそういった意味では、意思を持ちながらこの鯨の文化というものをしっかり町に残そうと取り組んでいるところでございます。

ちなみにこういったクリアファイルを作り、レシピを載せて配布しながらやっています。中身が見えないクリアファイルとはどういったことか。初めのうちは配布していたんですが、厳しくなって、少し負担してもらいながら進めております。こういうように鯨をPRしながら町の中で進めております。以上です。

【コーディネーター】

有難うございました。釧路市の蝦名市長には鯨食文化の伝統を守るためには普及していくことがポイントとしてお話し頂いたと思います。

続きましては、釧路市と同じくミンク鯨の沿岸域調査を行っている宮城県石巻市、亀山市長にお話しを伺いたいと思います。かつて大型捕鯨の一大基地として栄え、今日では沿岸小型捕鯨基地となっている石巻市なんですけれども、皆様ご存じのように、2011年3月11日、未曾有の被害を石巻市は受けられました。つい数日前ですね、石巻から発注されたアルミ製の小型捕鯨船の進水式が行われたという報道を目にしました。そんなことも含めまして、現在の様子なども中心にお話しいただければと思います。よろしくお願いたします。



石巻市長の亀山でございます。東日本大震災から5年と2カ月余りが経過いたしました。この間に本当に全国の皆様からご支援を頂きました。改めて皆様に感謝申し上げます。

今回の捕鯨ということですが、やはり鮎川というところ、皆様名前をご存じだと思いますけれども、石巻市が平成17年に合併し、牡鹿半島の先端の鮎川も石巻市になりました。ちょうど中心部から1時間くらいかかるところなんです、今回の東日本大震災で一番震源地に近い街なんですね。

ですから街は全壊いたしました。そして地盤沈下がですね、1m20cm沈下したということで、防潮堤の整備、堤防の整備を進めています。それと同時に、被災者の方々の住宅の再建も最優先課題として、高台移転ということで整備しております。平成28年度末には90%弱ぐらいまで完成するということでもあります。

今回沿岸調査捕鯨が4月9日から5月25日までの47日間行われたわけですが、捕獲頭数が51頭という目標だったんですけど、天候が非常に不順のために調査船が出られなかったということで、捕獲頭数が16頭ということでした。これは決して資源が少なくなったということではなく、やはり天候不順による結果だと、こういうふうに思っております。

そういう意味では、石巻市の鮎川を中心にして鯨文化はたいへん大きな存在でございます。調査船で捕獲されたミンク鯨で、頒布会をやっているわけですが、牡鹿半島の住民台帳上は1300世帯、頒布会に来られた方は1000世帯、地域にお住まいの8割の方々がその鯨の肉を買い求めるというように、非常に鯨に対して関心の高いところとっております。石巻ではいつでも食べれますので、皆さん鯨を食べたくなったらぜひ石巻においでいただければ、美味しい鯨を食べられますので、これもやはり私どもとしては地方創生の大事な宝というふうに思っております。調査捕鯨を通して科学的に資源量を確保しながら、我々としてはやはり商業捕鯨の再開を目指して、地方から発信していくことが必要だろうと、実は今日先生から話を聞いて分かりました。私どもも鯨文化、伝統文化というものをしっかり伝えて行くということが必要だと思っております。なかなか食べてばかりいて、発信力がいまひとつだなというふうに思っております。ぜひこれからは発信しながら日本の捕鯨というものを発展させていきたいというふうに考えております。

街中はこれから整備するんですけども、ホエールランドという鯨博物館がございました。そのホエールランドは津波によって全壊いたしましたけれども、今ビジターセンターの中にホエールランドを整備するというので進めております。平成30年かもう少しかかるかもしれませんが、各地域、世代に発信しながら、復興の様子などを見に来ていただければと思っています。

震災の時に皆様よくご覧になったと思いますが、鯨のでかい缶詰が横たわっている写真や、映像を見たことがあると思いますが、石巻の全体が鯨文化を楽しんでいる地域でございます。どうぞ石巻にお越しになって、鯨文化、あるいは鯨を食していただければと思っています。どうもありがとうございます。

【コーディネーター】

鯨を食べたくなったらぜひ石巻へ。復興の様子も合わせてお話しいただきました。有難うございます。

続きまして関東唯一の沿岸小型捕鯨基地として知られています千葉県南房総市、石井市長からお話をいただきたいと思っております。南房総市では江戸時代からツチ鯨を捕獲する独特の捕鯨文化があるということ、それを今でも継承しているということですね。

それから私が面白いと思いましたのは、南房総市の学校給食を、皆様、クックパットはご存知でしょうか、ウェブ上の料理レシピのコミュニティなんです、そこに投稿していらっしゃいまして、その中に南房総市の伝統料理として鯨の竜田揚げのレシピが投稿されているということ、非常に興味をもって拝見いたしました。タレという伝統食品もありということで、そのあたりのことをぜひご紹介下さいませ。



千葉県南房総市長の石井と申します。よろしくお願ひいたします。今日は森下さんの貴重なお話を聞かせて頂き有難うございました。お話の中にもありましたけれども、鯨に対する無関心ですか、それをなんとかしてでも阻止するのでしょうか、その大切さというのを話を聞いて痛切に思いました。私どもの南房総市は千葉県の南端にあります。私どもの地域の鯨の歴史なんです、千葉県の房総半島は東京湾と東は太平洋に面しています。

歴史の中では、冒頭山村会長から日本の古い文献の中にも鯨の文化が出てくるとありましたけれども、私どもの地域でも14、15世紀ぐらいから鯨漁は行われていたんであると言われております。はっきり分かるところでは、日本全国的に同じ状態だったと思いますけれども、江戸時代に入ってから、現在では鯨の拠点と違うんですけれども、東京湾側の私どもの隣の鋸南町の勝山というところで組織的に鯨漁が行われていました。船の数も60隻近い船で船団を組みまして鯨を組織的に捕獲していく漁が興ってきたのです。それ以降私どもの地域では連綿と、今でも漁業が盛んな地域でございまして、鯨漁が続いてきております。歴史の中では、今では、私どもの地域で鯨を組織的に獲るようになった拠点である勝山というところは、現在では鯨漁はございませんけれども、それから段々南下してまいりまして、自治体は違いますが、私どもの隣の館山市ですとか、合併する前の白浜町、その隣の千倉町、そういったところに捕鯨の拠点が移ってまいりました。

そして現在では、戦後ですね、旧和田町というところで、今日は外房捕鯨株式会社の社長様もおいでになっておりますが、現在の外房捕鯨株式会社が設立されて、現在に至っているという状況でございまして。私どもの地域の鯨漁に関しましては、ツチ鯨を年間26頭ということで鯨漁を行っております。これからが正にツチ鯨の漁期に入ってくるわけでございます。

先程来のいろいろな方々のお話にもありましたが、鯨を食べるといふ食文化に関しましては、私は年齢50歳になるんですが、私は普通に鯨料理を食べていました。ですから、私にとっても鯨は馴染み深い食べ物ですし、美味しい物だと思っています。ただ、確かに若い人たちは鯨を食べる機会がなく、そもそも鯨は美味しい物だということすら分からなくなっているというのが実態ではないかという気がします。先ほどコーディネーターよりご紹介いただきましたが、学校給食で私どもの地域としては竜田揚げですとか、南蛮漬けですとか、そういった料理を提供しております。回数が年に3~4回ということでそう多くはありませんが、子どもたちには地域の伝統的な食ということで、鯨料理を学校給食の中でも提供しています。

戦後、私どもの地域での鯨漁は拠点が和田町に移りまして、その鯨肉を加工する事業、私どもの町は鯨ばかりではなく魚を加工する産業も盛んなわけですが、その中のひとつとして鯨の加工産業というものも盛んです。鯨の捕鯨基地がございまして旧和田町、その隣にあります千倉町、そういったところで鯨の加工というものが盛んに行われております。そういった地域では鯨のタレという、独特のタレにつけて天日に干してというような食べ物なんですが、育つ頃にはそういった加工屋さんがたくさんございまして、そこら中に時期になれば鯨のタレが天日干しで干してあるという光景が広がっていたんですが、最近では若干減ってきてはおりますが、そういった状況でした。

私たちの地域も地域性がございまして、合併してから面積も230平方キロメートルと、それだけ広い面積になりまして、明治以降今日にかけては千倉町、和田町といった太平洋側の方に鯨の捕獲、加工の拠点が移ってまいりましたので、今日になりますとどちらかというと元々の発祥であった東京湾側の方は鯨の食文化というものが低調気味になってきておりますが、今では東京湾側の旧自治体とひとつの市になりましたので、学校給食では全体的に提供しているという状況です。

歴史的に今申し上げたような背景の中で、獲れた肉は行商人の方々が津々浦々まで売って歩くというもともとの地域でございまして、これからも私どもとしてはこうした鯨の歴史、食文化というものを守り伝えて行かなければならないと思っていますところでございまして。以上で私どもの地域を紹介させていただきます。

【コーディネーター】

独特の捕鯨文化、食文化をこれからも広く外房地域に守っていききたいというお話をいただきました。有難うございました。

続きましては和歌山県太地町、日本を代表する鯨の町から三原勝利議員にお越しいただいております。太地町は古式捕鯨の発祥の町として、沿岸小型捕鯨の基地として知られているところです。三原議員ご自身もIWCの総会で演説をされたことがあると伺っております。三原議員、どうぞよろしくお願いいたします。



「よう来てくれたよ、まあ上がってご飯食べてかませ」。太地の人はこのような呼びかけでお客を迎え、固い、しかし甘い、少し臭う、そういった鯨料理を食べながらお客と歓談しました。「太地の人は非常にホスピタリティに富んでいる」と今も言われておりますけれども、そういった性格をベースにして私たちの町は成り立ってまいりました。今日はシーシェパードの攻撃的になっている追い込みのリーダーを含めて漁業協同組合の皆さん、集団的な捕鯨を始めた和田家の子孫である和田さん、16名でこちらにおじゃましております。

「あがっておおせや」というのは私たちの町の挨拶のひとつでして、そういったかたちで食事をしている外を、「イルカいらんかいにいー」とカゴ売りのオバチャン達がイルカを商っている。日常茶飯事のことでした。

先程来から申されていますように組織的な捕鯨につきましては、それぞれの地域の歴史があろうかと思えますけれども、私たちの町ではしっかりと歴史が残っておりますのは、1606年（慶長11年）、初めて組織立った捕鯨を行ったという歴史が残っております。鯨絵巻に載っている勢子船の先頭で鉋を打ち込んでいる絵図というのは当時の絵図でございまして、私たちが町の誇りとして、また同じ地域の皆さんもそういった捕鯨を行っておりますけれども、突き取る捕鯨そのものが、網掛け方式という新しい手法を考えまして、これによって非常に効率的に鯨のスピードを弱め、弱まった鯨を捕獲するというかたちが続いてきております。

そのように町の歴史はいろいろあるんですけれども、私も子どものころからそういった鯨の現場にはよく足を運びました。当時小学校4、5年でしたか、昭和20年ぐらいなんですけど、あの当時大きな鯨をウィンチで巻き上げることにはなかったんですね。轆轤（ろくろ）でぎしぎしぎししいながら巻き上げました。私たちも邪魔をしないかたちで轆轤の大きな木材を押すのを手伝いました。鯨のヒゲの付け根にある歯茎ですね、これを食べるとギンギシと非常に美味しいんですよ。それを頂くために轆轤について回りました。こうした生活の中での体験を通して太地町の捕鯨は発展してきたんです。一時は南氷洋に400人近い人が参加しまして、太地町の財政の年収の約半分はそういった方たちの血と汗によって賄われ、町が成り立ったという歴史があります。

いろいろなお話を積み重ねながら大きくなって私は現在78歳、この10月で79歳になります。そういう人生の中で忘れられないメロディがひとつあります。私は地元ではカラオケの帝王と呼ばれているのですが、轆轤を巻く唄を、子どもの頃手伝っているときに当時のおじいさんが唄っているのを今でも覚えています。これまでの捕鯨、これからの捕鯨については別のコーナーでお話する機会があると思いますので、帝王の声をひと声聞いて頂いて、その鯨巻き唄、轆轤唄の一節をご披露したいと思います。

もうひとつ、八戸に町づくりのために出てきなさいということで東京海洋大学の加藤先生に連れられて、八戸へ行ってまいりました。散策していると、神社に鯨によく似た石が飾ってあるんです。聞きますと、これは鯨石と言って八戸太郎という鯨の記念碑だということを聞きまして、いよいよ話を聞きますと、この八戸太郎はシーズンになると魚を湾の中に追い込んでくれて、太郎が来るのを皆が待ち構えていたんだと。しかし紀州の鯨取り達が鉋を突き刺して半死半傷で帰って来たのを私たちは感謝しながら、またいろいろと弔いながらこの石を飾ってきましたという話を聞きました。私たちは弱ったなと感じたんですけども、その時はそれはそれとして、その鯨石を供養するために、轆轤巻き唄を唄いました。ここで轆轤巻き唄を一節挟ませていただきまして、次のテーマに移らせて頂きます。「ホーランエー・・・」

【コーディネーター】

ありがとうございました。轆轤で巻き上げるときの仕事唄をご披露いただきました。今の仕事唄をお聞きしていると、仕事をしている人たちの息を合わせる目的だけでなく、鯨に対する感謝の気持ちとか、敬意を表する気持ちとか、そんな気持ちもいろいろと込められた唄ではないかと感じました。

続きましては、古式捕鯨基地として知られています山口県長門市の大西市長にお話をうかがいたいと思います。

長門市では青海島通地区にある向岸寺というお寺で、先ほどの感謝、畏敬の念というお話しにもつながると思うのですが、鯨の位牌ですとか、鯨の過去帳が残されていて、今でも毎年鯨の回向が営まれているとうかがっています。また、通地区には同じように地元唄も残っていて小中学生は授業で学んでいるとうかがいました。その辺のお話しもぜひお願いいたします。



山口県長門市市長の大西倉雄です。カラオケの帝王の後になかなかやりにくいんですが、山口県長門市は童謡詩人の金子みすゞさんが生まれ育った所でございまして、生きとし生けるものにすべて優しい眼差しを注いでいる金子みすゞさんの故郷でございます。わが町では、金子みすゞさんだけが特別じゃないんです。長門市民すべてがそういう優しい心根を持っているのです。そのお話をしていきたいと思いますが、司会の方から話がありました。

山口県の長門市は長州藩の捕鯨基地として日本海側に面した捕鯨基地のひとつであり、鯨組という組織を作り、産業として行っておりました。

そういう中であって、獲った鯨にはですね、中には胎児がいることもございます。胎児を葬るために鯨墓を作り、そして獲った鯨の戒名を付け、そして鯨鯢過去帳も作成をして、鯨を食べながら、明治から鯨を獲っておりませんが、獲らなかった今日までも毎年4月には鯨回向が行われているところでございます。毎年私も出席させていただいておりますけれども、本当にその当時から百数年になるわけですから、鯨に携わっていた方はほとんどいないのですけれども、その浦々の人達がお寺さんに集まってこられるんです。それがいまだに続いているということでございます。これは通だけじゃないんです。仙崎にもそういった鯨基地がございました。仙崎でも同じように鯨回向が行われているわけでございます。そういった優しさを持っているところが長門市でございまして、それを長門として、優しさを抱いていくということで今長門ブランドの構築に向けて頑張っているところでございます。

今日は皆様方に一枚物リーフレットと通くじら資料館のリーフレットを配布資料に入れさせていただいておりますが、中に今お話し申し上げたことをまとめておりますので、ぜひご覧いただきたいと思います。金子みすゞさんも鯨法会という詩を作っておりますから、これもぜひお土産にお持ち帰りいただきたいと思います。

お隣の下関市さんとは、お隣どおしになったということで、鯨のつながりで様々な交流をいたしているところでございます。私も中尾市長も鯨のワッペンを付けておりますけれども、これをお互いの市でこれを付けながら交流をいたしているところでございます。ひとつだけお話し申し上げますと、鯨の文化交流の中で下関市と長門市の鯨料理の食べられるお店のマップを作成いたしました。先ほど話がありましたけれども、下関市と長門市に來れば、どこに行ったらどういう鯨料理を食べられるかマップを作っておりますから、ぜひ全国から山口県へもお越しいただきたいと思っております。

そしてもうひとつくじら資料館のリーフレットを入れてございますけれども、そういった鯨文化についてはまた後ほどお話し申し上げたいと思いますが、様々な事業を展開しているところでございます。後ほどこれについては説明させていただきます。どうも有難うございました。

【コーディネーター】

市民皆が優しい心を持っているんだということを、鯨を通して長門ブランドとして広めたいというお話をいただきました。

続きましては、今お話がありましたように長門市と連携をなさっていて、調査捕鯨船団の基地化を目指していると伺っております山口県下関市の中尾市長からお話しを伺いたいと思います。下関市でも本当に様々な取り組みが活発になされているんですね。

月に一度学校給食で鯨メニューが出されているほか、高校では鯨料理の調理実習もあって、さらに市役所の食堂でも鯨料理が食べられると。小学生向けに鯨サマースクール、あるいは一般市民向けの鯨料理コンクールなど本当に様々な取り組みを活発にされているということを伺っております。よろしく願いいたします。



下関市長の中尾です。よろしくお願いいたします。先ほど太地の三原議員が素晴らしい喉を披露されましたが、私実は市長に就任する前は市場のセリ人をしてまして声には自信があるんですよ。ぜひ今度三原議員と勝負したいと思います。今日は鯨で行きます。

下関市は海峡と歴史の町です。その中でも水産物。海岸線は220キロあります。ふぐ、うに、くじら、あんこう、いか、が五大ブランド、「ごちそう」と言うんです。どれも日本一なんです。

それから合併しまして、広くなりまして、東京23区の1.2倍あり、720平方キロメートル、とても広いです。農業は山口県1位なんです。山に入りますとイノシシ、鹿、最近はサルも増えてですね、また、熊が出たと大騒ぎしております。虫はホタルなんです。今日は鯨の話なので鯨に戻ります。

約2000年前の弥生の遺跡から鯨の骨が出てきます。その骨を加工した「あわびおこし」ですかね、それも出てきてですね、その頃から、それ以前からふぐとか鯨ですね、我々の祖先は食べておりました。中世の話ですが、源平の最後の戦いというのが壇ノ浦で1185年、ここで平家が滅亡するわけですが、その時にもイルカが登場しています。また江戸時代にたいへん繁盛いたしました北前船の寄港地であったことで、多くの問屋を通して山陰側の古式捕鯨で捕獲された鯨肉、また鯨油ですね、これがたいへん流通しておりました。その後明治に入りまして、明治32年に初めて近代式の捕鯨会社が、日本遠洋漁業株式会社というんですが、出来まして、これは長門市で出来たんです。下関に出張所があったということで、古式捕鯨は長門、近代捕鯨で発展した下関、この連携は日本一であります。

その後下関は戦前戦後を通じてマルハ、今はマルハニチロですが、旧大洋漁業の南氷洋の基地として大発展いたしました。私ども子どもの頃は毎日鯨、鯨専門のデパートがあったりですね、様々な加工もあったのですが、その流通加工ということで、それに関連する造船、また関連産業、そういうのがたいへん発展しまして、下関発展の基礎を造っていただきました。ただ最近は商業捕鯨が出来なくなりましたので、次の時代を見据えているところでございます。

先ほど来られました、山口県代表の林芳正参議院議員ですね、前の農林水産大臣ということで水産、特に鯨、南極海の母船につきましてはたいへんご尽力頂きました。本当にありがとうございます。

先ほど学校給食の話が出ました。年に12回出しております。子どもが約3万人おられると思います。教育委員から当初11回にしてくれと言われたんです。なぜかと聞いたら、8月は休みで学校給食を出さないと。だけど1年は12カ月ありますから、7月に2回出して下さいと、予算が足りなければ私がなんとかすると頼みました。教育委員会が出すだけでは足りませんよ。農林水産部からも予算が出ているんです。

先ほど森下コミッショナーが素晴らしいことを言われたですね。まず地方で処理したらいいんじゃないですかと。これぜひお願いしたいですね。今南極海の調査捕鯨は333頭。全量下関の冷蔵庫に入っているんですよ。これをまず下関で処理させていただいて残ったものを全国へね。東京が一番最後。それから老人ホームにはくじら食文化を守る会が出しておりますし、さかな祭りで鯨が名物なんですね。下関の魚はふぐですね、動物は鯨ですよ。それから鳥はペンギン。下関の水族館に全部いるんですね。下関の水族館は中規模ですが、アジアで第5位、日本で第3位ですよ。東京よりすごいんですね。

今長門市と様々な連携をしてですね、これは鯨だけではありません。経済交流、文化交流、それから高速道路もできましたしね、そういう交流を行っているところでございます。だいたい申し上げたいことは申し上げましたので、これからどうなるかということについては、だんだん時間がなくなって心配しているんですが、次の回に回しますので、よろしくお願いいたします。

【コーディネーター】

古式捕鯨から近代捕鯨につながる捕鯨史を歩む町として知られております長崎県新上五島町、坪井泰助議員にお越しいただきました。新上五島町の11名の町民の方が現在調査捕鯨に従事されていると伺っております。また、新上五島町には鯨の顎の骨の鳥居がある海童神社ですとか、鯨賓館（げいひんかん）の「げい」が鯨なんですね、鯨賓館ミュージアムという施設もあるとうかがっています。それではよろしくお願いいたします。



「全国鯨フォーラム2016東京」開催を、心からお慶び申し上げます。私は、長崎県新上五島町の坪井泰助と申します。鯨フォーラムの第1回が石巻で開催されまして、私どもの小さな町でも第2回の鯨フォーラムが2008年に開催されたところでございます。私どもの新上五島町は、長崎県の西の果て、東シナ海に臨むところに浮かぶ小さな町であります。山が海へと迫り、僅かな平地に田畑と家屋が点在しております。そんなふうに言うと、いかにも田舎のように思えますけれども、汽車は通ってませんが、バスは通っていますのでどうぞよろしくお願いいたします。

そのようなことから、私たちの祖先は海へと生活の糧を求めてまいりました。捕鯨の歴史も古く、約400年前程の江戸時代に遡ります。紀州、現在の和歌山県の先人たちの協力を得ながら、突き取り法から網取り法へと進化をして行くんですけども、当時の絵図からも分かるように、それはたいへんなことだったと思います。動力がなくて手漕ぎの船と鉋だけであの巨大な鯨を仕留めるわけですから、それは想像を絶するご苦労があったと思います。

そういった当時のことを思い起こせば、たいへんだったと思います。我々が住む有川湾をすぐ見下ろすところに、鯨見山というところがございます。その山頂には江戸時代の正徳2年、1712年10月に鯨への畏敬の念を込めた供養塔が建てられていますが、碑文には元禄4年から正徳2年までの21年間に1312本の鯨を捕獲したことが刻まれております。

やがて、明治、大正、昭和と時代が大きく変わっていく中で、捕鯨法も急速な機械化が進み、近代捕鯨へと変遷をたどり、ノルウェー式捕鯨から母船式遠洋捕鯨へと、それは近海捕鯨から南氷洋捕鯨へと移行していきますが、商業捕鯨最盛期には本町有川地区から600名以上の人々が捕鯨に従事いたしました。

現在、ご紹介があったように、10数名が調査捕鯨に携わっております。商業捕鯨最盛期には捕鯨オリンピックというのがございました。そこで優勝の立役者であった深川さんという名砲手がおります。東京に住んでおりますので、今日の懇親会に参加するようにしております。

私たちの町のイベントとしては毎年1月14日に、弁財天（めーざいてん）祭。これは青年団が太鼓を打ち鳴らして鯨唄を唄い、鯨にまつわる伝統的な場所と、各家々を回ります。羽差太鼓というのもございまして、これは年間15～16回各種イベントに参加して、遠くハワイ、上海、韓国の蔚山市に出向いたこともございます。

これからも先人たちの築き上げたフロンティア精神と歴史と食文化を継承し、関係市町や団体と連携を密にして、商業捕鯨再開に向けて情報を発信し続けていきたいと思っております。

それに毎年10月の最終日曜日には「有川くじらどん祭り」が五島うどんの里において開催されています。うどんの歴史も古く、1000年以上前に遣唐使により中国から伝わったとされ、くじらどん祭りの際には鯨肉を安く販売したり、魚の重量当てクイズ、抽選会などイベントが盛りだくさんでございまして。

この場をお借りして、キリスト教関連遺産である教会群の世界遺産登録に向けての話題や自然のすばらしいロケーションの地、新上五島町にぜひお越しくださいますよう、ご案内申し上げます。以上です。

【コーディネーター】

ありがとうございました。古くから本当に深く土地の皆さんが鯨と関わってきたんだということを知りやすく教えていただきました。ありがとうございます。

そろそろ時間が差し迫ってまいりました。二つ目三つ目と質問を用意していたんですが、最後の質問とさせていただきます。テーマは今後、これからということです。地域のそれぞれのこれからでも構いません、あるいは鯨フォーラムそのものについてのこれからのご提言、ご要望でも構いません。

皆様にお話しただけですように、たくさんお話を用意してきて下さったかと思うのですが、少し割愛しながら7名様すべてがお話しできるようにお考えいただければ有り難いです。先ほどと同じように釧路市長様からお願いいたします。



これからどうするということは、多くの方々に鯨を食べてもらうという、子供たちがしっかり食べるということが必要だと思っております。うちでは年2回の学校給食ということですが、キャビアやトリュフのような位置付けになればいいんでしょうけど、先ほどの森下先生のお話を聞いていても、そういった位置付けにはならないということになれば、美味しい物は素晴らしい物として、しかし多くの人達に馴染んでもらうようなかたちをとることが一番重要だと考えております。

そのためにはどうするかということでございます。私どもも給食を出しておりますが、下関や長崎は加工する部分がしっかりありますからね、それで出し易いんですよね。わが町の場合は、3分の1くらい安くは購入できるのだけれど、それを竜田揚げのようなものに加工するという、こういったものが関わってきますと、例えば豚肉と対比していきますと、黙って4割ぐらい上がってきます。豚肉だったら62～63円で出来るものを、90円ぐらいのコストになってくるということになります。そういった意味でやはり広く使いづらいというんでしょうか、そういったかたちになってきます。ざっくり計算して行っても給食で使っていくためには、うちは13000食ですから、2回で26000食です。そのために追加に150万円ぐらいなくてはできないということになりますので、それを他の町でどれだけの方がやるかといったときに、非常に難しいものがあると思っているわけでございます。

ひとつひとつの町の特徴の中で、鯨の位置付けをどう高めていくかということはひとつありながら、もうひとつ鯨を食べていくということをいかに幅広く他の町に拡大していくか、先ほどのご意見でも「守る」ではなく「広める」というお話がございました。特にそういったシフトに持っていくためにはどうするのというですね、そういうことがいけば重要になってくると思っております。

私たちの町では、今まで12年間の取り組みの中でそういったいろいろな意見は出てきておりません。しかしこういう形の中で続けて行って厳しい環境とか出てきたときに、どんな意見が出てくるのかはまだ分からないわけでございます。しっかり説明していこうというのは自治体単位でやっていくことだと思うんですけど、しかしそういった自治体をいかに増やしていくかということをするので、そこが一番大きな課題になってくるなと思っております。こういったところをポイントにいただければ有り難いなと思っております。やっている人たちはいいんです。やっていない人たちにどうするんだと、ここが一番の問題だと思います。



今回津波の被災を受けましたけれども、鮎川に立地している捕鯨会社がいち早く立ち上がったということで、調査捕鯨の平成23年度は実施されませんでした。平成24年度からは再開することが出来ました。鮎川につきましても沿岸部の地場産業として捕鯨というものが大きな役割を果たしておりました。地方創生という中でやはり地元の産業をしっかり大事にすることが過疎化を防ぐ重要な視点だということふうに思っております。

地域の捕鯨を推進するために引き続き調査捕鯨で科学的な資源管理を進めていただくということが重要だということふうに思っております。今日の森下先生のお話の中で、調査計画が目的ではない、そう思いました。私ども調査捕鯨で食べられるというだけで満足していたところがあるんじゃないかというふうに思います。今後捕鯨問題の発信を高めて行って、そして鮎川の捕鯨も進めていくことも地域にとって重要ではないかと今日は勉強させていただきました。ありがとうございました。



今日のお集まりの中で、繰り返しになりますが、現役の捕鯨基地のある自治体としてしっかりと捕鯨文化というものを地元として頑張っていかなければならないなと思いました。国際舞台の難しい交渉は、森下さんや国会議員の先生にお任せすることが多分にあると思いますが、我々の役割はしっかりと絶やさないように頑張っていくことだなと思いました。私たちの地域でこれからの展望ということになりますと、南房総市は日本で道の駅が一番多い市でありまして、八つございます。

3年前に八番目の道の駅を捕鯨基地のございます和田浦にオープン致しました。「和田浦WAO!」という道の駅なんですけれども、関東道の駅30選にも選んでいただきまして、関係者等々頑張っております。この道の駅もですね、入ってくるとすぐ目につくところに、シロナガス鯨の骨格標本を、下関市や太地町にもございます同じものですが、設置させていただきまして、鯨の町としてのシンボルとして、この道の駅を中心に、鯨の文化を発信し続けて行きたいと思っております。

また、学校給食で提供している料理についてクックパッドを通じて宣伝しています。私たちの市では日本一おいしい学校給食というのを標榜いたしまして、学校給食はすべて100%米飯給食ということでお米のご飯です。パンやラーメンが食べたいという声もありましたけれど、市の方針ですからということで100%米飯給食ということを実施させていただいております。それは地産地消に基づく地域の農水産物を生産してくれている第一次産業の従事者への感謝と、そうした物で得られる効能ですとか、地域の伝統文化の継承といったものをすべて米飯給食の中で伝えて行こうということで実施しています。そうした中でも、鯨の料理というものをこれからもしっかりと伝えて行きたいと思っておりますし、先ほど申しましたクックパッドなどを通じまして伝えて行きたいと思っております。

私どもの地元は関東で唯一捕鯨基地ということで、外房捕鯨株式会社に頑張ってもらっておりますので、そういった意味で責任は重大だなと、これからさらに頑張っていきたいと思っております。よろしくお願いします。



鯨芸能には他にもたくさんあるんですね。披露したい気持ちはあるんですけど、次にいたしまして。先ほど森下先生がお話しになりましたが、過去を辿るのではなくて、前向きにもっとしっかりしたかたちで一步を踏み出そうじゃないかという話がございました。私たちの町も先ごろ文化庁から「鯨と共に生きる」ということで日本歴史遺産の認定を賜りました。これは私どもの町だけではなくて周辺の捕鯨を行った町と一緒に指定を受けているんですけども、これからこれらの町の皆さんとも力を合わせて行きたいと思っております。

また、私たちは「鯨と共に生きる」ということで、森浦湾というのが太地町の入口にあるんですけど、そこで養殖事業が盛んに行われておりましたが、それを全部撤去いたしまして、海洋の鯨を50頭~100頭入れて、鯨のミュージアムにして、日本の、世界中の皆さんに呼び掛けてみたいという気持ちを持って、具体的な方向を辿っております。

鯨におきましては、過去の歴史がたくさんありますけれども、こういう構想に基づいて鯨の博物館、あるいは太地町のいろんな遺跡、それと同時に太地町民が鯨の展示物になろうじゃないかということで、底抜けに明るい町民性があるんですが、単に語り部だけで終わらない、未来を求め、未来を目指してこの新しい計画を進めようとしております。具体的に進められているわけでございますけれども、今日ご出席いただいた大隅先生にもいろんな貴重なご指導を賜りながら、この構想を出来るだけ早く実現して、鯨の町、また日本の捕鯨といったものをここを拠点に広げてまいりたいと思っております。よろしくお願いします。



私のところは、くじらの食文化を継承する会の方々に活発に活動していただいております。例えば2月3日の節分の日、これを「鯨の日」と定めて様々なイベントを開催していただいております。年に一回、鯨の頒布会を開催され、その寄付金をもって市内にある幼稚園、保育園全部に、2月3日に鯨肉を提供されているところでございます。小さい時からしっかり食べさせて、慣れさせていくことからいきますと、入った時から食べているということでもあります。

小学校では、下関市さんのように年12回というわけにはいきませんが、年2回食べさせているところでございます。この鯨肉ももう少し安いといいがな、という希望を持っております。

また、長門市には貴重な文化遺産がございます。地域の行政といたしましても、これをしっかりと伝承していかなければならないという思いでございます。

下関市で鯨フォーラムが開催された時、私はたまたま県議会議員で農林水産委員長として出席をさせていただきました。その際、長崎県の鯨議連というのがありまして、山口県には下関市と長門市があつて鯨議連はないんですかと、そこですぐに県議会で鯨議連を作りまして、幹事長を務めさせていただきましたし、そしてまた、長門市にも鯨議連を平成17年から、合併して一市になりましてから設立するなど、様々なかたちを巻き込みながら、しっかりとそういった運動を底辺に広げて行くことが重要だと強く思っております。

また、そういったところと連携していくことが重要だと思っておりますから、皆様と横の連絡を取りながら、連携していけたらという思いを申し上げまして、終わりたいと思います。有難うございました。



それでは4つほど簡単に発表します。私たちの町も皆様方と同じように、「鯨日本一」の町を目指しております。市を挙げて取り組んでおります。今後の展望ですが、まず一点目は、長門市さんと一緒になって古式捕鯨、近代捕鯨の日本遺産の登録を目指すことを進めて行きたいと思っております。

二点目は現在行われている鯨類科学調査の副産物の件ですが、現在の副産物というのは販売をして利益を科学調査の方に入れるという仕組みになっておりまして、どうしても価格が高止まりになってしまいます。そのため調査は調査、販売は販売ということで、切り離して

いただきたいと思います。先ほど森下コミッショナーの話の中にもありましたが、現在のわが国の全体の流通量が5000トンぐらいありますが、その中で輸入品が半分近くなると思えます。それに対抗するためにも、また地方にもっと食べてもらうためにも、価格を下げる仕組みをぜひお願いします。

三点目は、日新丸が老朽化をしています。ぜひ代替船、新船の建造をお願いしたいと思います。これは先般下関でも海員組合の幹部から皆さんの前でそういうアピールがありましたので、ぜひお願いいたします。

四点目に、下関は南極海の鯨類科学調査の母港化を目指しています。これは国の政策を地方から応援するものでありまして、市を挙げてこれからはしっかりサポートさせてもらおうと思っております。以上であります。



私どもの町からも少なくともはなりましたが、調査捕鯨に十数名携わっております。ということから南極海の安全、シーシェパードによる目に余る妨害に対しても非常に神経を尖らせるところでございます。先ほどから何度も声が揚がっておりますが、食文化の継承というよりも、拡大につながっていくためには、やはり裾野を広げて行かなければいかんと思うんです。せめて一般家庭の食卓に1~2回ぐらい登るような価格設定にいただければと思います。それこそが需要と供給のバランスに必要なだと思います。

目視や捕獲するための技術を文献だけで残しても伝わらないのではないかと常々思っています。先輩から後輩に伝えて行く、そのように続けていければと思います。

それから最近、世界的に難民が多いですね。二十万人とも、三十万人ともいわれている世界の難民の方々の食料支援に鯨肉を使ったレトルト食品などで国際支援が出来ないのか。そうすれば日本は自国のためだけに獲っているんじゃない、捕鯨をしているんじゃない。世界的なことで頑張っていると、理解を求めて、反捕鯨国も支持国にまわってもらえるんじゃないかという気がいたします。以上です。

【コーディネーター】

ありがとうございました。ちょうど時間となりました。限られた時間の中でのパネルディスカッションではございましたが、各自治体の皆様が抱える「これまで」と「これから」、ご要望なども挙げていただいたと思います。ではこれにて第二部のパネルディスカッションを終了致します。皆様有難うございました。

【閉会の辞】



本日は、太地町長の三軒会長が所用で出席されておられませんので、代わってご挨拶させていただきます副会長の中尾でございます。「全国鯨フォーラム2016東京」は、お陰様で大盛会でありました。我々、捕鯨を守る全国自治体連絡協議会のメンバーも、本日はパネリストとして参加させていただきました。この鯨の文化は、我々が古来より、祖先より引き継いだ大事な文化でございます。将来の商業捕鯨に向けて、皆様と気持ちをひとつにして頑張ってまいります。以上で閉会の言葉といたします。有難うございました。





憲政記念館



受付



総合司会 岩崎佑子



東京宣言採択

全国鯨フォーラム2016東京 東京宣言

四方を海に囲まれたわが国では、5000年以上前から鯨を貴重な食料として利用してきた。現在でも、全国各地で捕鯨文化と鯨食文化が継承されている。

一方、1982年に国際捕鯨委員会において商業捕鯨モラトリアムが採択され、日本は1987年から調査捕鯨を開始し、科学的情報の収集に努めているが、モラトリアムは未だ解除されていない。

商業捕鯨の停止が長引く中、鯨を食べた経験のない世代が増え続け、捕鯨文化と鯨食文化の継承が極めて危機的な状況にある。

そのような中、2011年には東日本大震災により、わが国の主要な捕鯨地域が未曾有の被害を受け、今もなお復興の途上にある。

こうした状況に鑑み、捕鯨に縁の深い全国の自治体が一丸となり、捕鯨文化と鯨食文化の継承を目的に、全国鯨フォーラム等を毎年各地で開催している。

本日、全国から捕鯨に縁の深い自治体をはじめ、捕鯨関係者が東京に一堂に会し、次の通り宣言する。

1. 長い歴史の中で育まれてきたわが国固有の捕鯨の伝統と鯨食文化は、先代から引き継いだ誇るべき財産であり、これを次世代に継承することは我々の使命であることに留意し、来年以降も全国鯨フォーラムを継続していく。
2. 東日本大震災により未曾有の被害を受け、今もなお復興途上にある我々の同志の捕鯨地域を引き続き支援していく。
3. 沿岸小型捕鯨によるミンク鯨の捕獲枠の確保は、沿岸捕鯨地域の住民にとって長年の悲願であり、全国鯨フォーラムの最優先事項として早期解決を求めていく。
4. 日本が実施している南極海及び北西太平洋における鯨類科学調査の継続実施を強く支持し、その成果や意義を広く国民に周知する。
5. 世界人口の増加による将来の食料不足に備えるため、海洋生物資源の持続的利用は重要な施策であり、将来の有事に備えるためにも、捕鯨技術の伝承に努める。
6. 鯨食経験のない世代が増え続けている中、学校給食等によって若い世代に鯨食を増大させることが捕鯨文化と鯨食文化の継承にとって緊要となっていることに鑑み、学校給食への鯨肉供給をさらに拡充する。

以上

2016年5月31日
捕鯨を守る全国自治体連絡協議会
日本捕鯨協会
他捕鯨関係者一同